

## ルカによる福音書15章「失われた者が見つかる喜び」

### 1A 罪人を受け入れるイエス 1-2

### 2A 失われた者を捜す心 3-32

1B 迷った羊を捜す羊飼ひ 3-7

2B 銀貨を無くした女 8-10

3B 息子をなくした父親 11-32

1C 放蕩息子 11-16

2C 我に帰る息子 17-20

3C 息子を祝う父親 21-24

4C 妬み怒る兄息子 25-32

### 本文

ルカによる福音書15章を開いてください、私たちにとってとてもよく知られている放蕩息子の喩えが出て来る章です。けれども、私たちはそうした有名な箇所や話を、イエス様がお語りになっていた文脈や背景を踏まえながら、私たちに神が語りかけている声に聞いていきたいと思えます。背景として、ルカは食事の場面を取り上げています。神の国というものが、13章29節にあるように大祝宴として描かれているからです。主にあって、その平和と豊かさを互いに分かち合う姿がそこにはあります。そして、聖霊によって私たちは、その喜びと平安、また神の義を味わいます。

14章は、パリサイ派の指導者の安息日における食卓が場面でした。そこに、神の平安と分かち合いがあったか？と言いますと、そうではありません。イエス様がいかに、彼らの解釈する安息日の掟を破るかどうか、試していたのです。イエス様は憤られました。自分の息子や家畜が井戸に落ちたら安息日でも救い出すのに、どうして水腫を患っている人を癒すことが安息日違反なのか？ということです。人を試し、裁くようなところに平和の交わりはないですね。

そして、上席を好んで我先に座ろうとしている姿もありました。それから、招待されている人々は影響力を持った人々であり、人脈作りというか、あとで見返りを期待していました。そういったところに、真の平和はありません。へりくだりの中に平和があります。見返りを期待しない、恵みの中に平和があります。そして神の国の食卓に着くことは、なんと幸せなことでしょう、と客の一人が行ったので、イエス様は、ここにいる人々は「自分のことがあるから、あなたのことは必要ありません。」という自己満足、自分に充足している人々なので、神に招かれているのに応答せず、神の国には入れないことを話されました。神とキリストにある交わりに、最も敵となる心は「自分は間に合っています」ということでしょう。神なしに生きられないと渴望しないところには、真実な平和はないです。

私も思い出しますが、アメリカの日系の人々の聖書の学びの集まりに、ある韓国人夫婦が来ていました。かつて日本で働きをしていたということですが、私に対して神学的な試問をその奥様がしてきました。そしてもう一つに聖書の学びにも招かれました。そうするとご主人のほうが学びの後で、私の教えたことに反論し、それがいかに危うい教えなのかを説きました。妻と私はそそくさと、その場を離れていきました、その後の交わりも無しに。もし神学議論や論争をしたければ、そういった場において、相手を尊重しながら行うべきですね。どんなに知識があっても愛がなければ、全く無益であることをパウロは教えました。

そこで 15 章は、対照的に、取税人と罪人とのイエス様の食事の場面になります。パリサイ人と律法学者が不満を述べますが、彼らが見失っていた神の心をイエス様は思い起こさせます。

### **1A 罪人を受け入れるイエス 1-2**

1 さて、取税人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。2 すると、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。

罪人を受け入れて食事をしているということに、そこにある救いの喜びではなく、不満を言っているパリサイ人たちと律法学者です。(午前礼拝で詳しくお話ししました。)イエス様は初めの二つの喩えによって、ご自身の思いを伝えておられます。そして三つ目の放蕩息子の喩えを通して、ご自身の思いに対して彼らがどのような状態にあるかを示されます。

ある方が、とても興味深いことを書いておられました。「羊の皮を被った狼は、私たちの内にある罪におべっかを使う。けれども、キリストの愛のうちに隠された、砕かれた、惨めな者は、自分自身の罪を示され、悔いることを好む。特に、愛の主が死んでくださった他の罪人に対して愛がないことの罪だ。」隠された罪を罪として示すどころか、それを助長するようなことを言うのは偽教師だということです。けれども、本当に砕かれた人は、キリストの愛の中で自分の罪が示されることのほうを好みます。しかし、次が大事です、その罪とは特に、罪を犯した他の人々をも主は愛して、死んでくださったのに、その人たちを愛していないという罪です(ローマ 14:15)。私たちは、自分自身のことと罪を犯している、犯していないということに目が向きがちですが、他の罪人のことを受け入れていないという罪については、意外となおざりにされています。愛によって歩んでいないという罪があるということです。ですので、これからイエス様が語られるのは、決してパリサイ人や律法学者だけの問題ではなく、私たちの心に対するイエス様の語りかけなのです。

### **2A 失われた者を探す心 3-32**

#### **1B 迷った羊を探す羊飼いの心 3-7**

3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。4 「あなたがたのうちのだれかが羊を百匹

持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。5 見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、6 家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うでしょう。7 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。

イエス様が、取税人や罪人と食事をしておられた時の思いは、ここにある喜びでした。罪を悔い改めた者が救われる喜びがイエス様の心を満たしていました。その喜びに対して、パリサイ派や律法学者は不満を述べていたのです。教会において、人々が救われることを願わずに、そういったことには無関心で、自分たちのことで不満を述べていたら、パリサイ人や律法学者と同じ思いになってしまっているのかもしれない。

ここでの喩えは、とてもありふれた光景です。羊飼いが羊を飼っている姿は、イスラエルの地のどこでも見ることができました。そして今でも見るすることができます。イスラエル、ヨルダン、そしてトルコでも見ました。私たちが聖地旅行に行きますと、羊の群れを見ると喜びますが、現地の人はいくつにもありふれた光景なので、かえってびっくりしているかもしれません。そして、羊がいなくなってしまうということも、よくある事件であったことでしょう。

動物は家畜であっても、誰にも飼われなかったら野生化するかもしれません。けれども、羊は違います。群れからいなくなってしまうと、自分がどこを歩いているのか全く分からず、目の前のことしか考えられなくて、崖があっても避けることはしないでしょうし、すぐそばに狼がいても、かえって近寄って行ったりするかもしれません。ちょうど、2歳、3歳の子が親からはぐれてしまうような状況だと思います。私も海外宣教の地で、若いご夫婦とレストランで食べていた時に、2歳か3歳ぐらいの子がいなくて気づきました。私は、一気に自分の体から血が引いていくのを感じました。親はなおさらのことです。10数分後に、近くの別のレストランに入り込んでいて、そこのお店の人が誰の子なんだろうと探していたのを発見しました！

こうやって迷子になる羊のことを、主はイザヤ書において、罪を主に対して犯している民として形容しておられます。「53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」

そして、羊飼いの話に戻りますが、羊飼いは野原で、石を積み上げて囲んでいるだけの羊の囲いのところに夕暮れに近づくと、連れて行きます。一匹ずつ、門のところで杖を横にして、怪我しているところはないかどうか調べながら、そして羊の数を数えながら中に入れていきます。そして、九十九匹しかないのに気づきます。彼は、門のところに茨の枝を置いて、そこから天敵が入ってくるのを防ぎ、そして捜しに回ります。

ここで、大事なのは、「九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないで  
しょうか。」という言葉ですね。主の愛は、このように計算しません。しばしば、キリスト者の間でも  
計算が入ります。宣教の働きについて、日本だけでなくどの国でもこういった声が聞こえます。  
「イエス様を信じていない人たちはこの国にも多くいるのに、どうして文化も言葉も違うところに行く  
のか？ お金もかかるのに、非合理的だ。」ということなのです。こう言った声が聞こえるのです、「な  
ぜ、日本にいるのに もしそういった合理的に見えるような考え方をしていたら、神はご自分の独り  
子であるキリストを、全く罪深い私たちのために遣わすことはなさらなかったでしょう！ 愛というの  
は、99 匹を置いて一匹を捜しに行くような、人間的には無謀、狂っているように見えるのです。こう  
いった要素が、イエス様の働きにあるのだということを知る必要があります。

そして、「見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ」とあります。疲れ果てていたのでしょうか、羊飼いは  
喜んでその羊を肩に担いでいます。主はイザヤ書で、民に対してご自身が担うと言われました。  
「イザ 46:3-4 ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいたと  
きから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにす  
る。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背  
負って救い出す。」

そして羊飼いは自分だけで喜ぶのではなく、近所の人や友人を集めて、見つけたことを祝っ  
ています。私的な喜ぶだけでなく公にしているのです。私たちも、イエス様が誰か信じて受け入れ  
たとなったら、その喜びを他の人々にも分かち合いたいと思いますね。良い知らせは、一人だけで  
抑えていることはできません。パウロは言いました、「 I コリ 12:26 一つの部分が苦しめば、すべ  
ての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」

そして、結論付けておられますね、「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九  
十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」イエス様は、悔い改める必要の  
ない九十九人と言われていますが、これは自分たちを正しいと思っているパリサイ派と律法学者  
たちのことを指していますね。必ずしも正しいではありません、彼らとて同じように悔い改めない  
といけないのです。けれども、まさか自分たちが罪人だとは思っていない、だからイエス様は敢え  
て囲いに置かれた九十九匹にしておられます。

そして、天においては、一人の人が悔い改めたら、そのために大きな喜びが、祝宴のように天  
において聞こえて来るということです。かつて、ホロコーストの時にナチス将校であったシンドラー  
が、ユダヤ人を賄賂で救出していましたが、その生き残った人々が彼のために指輪を作り、そこ  
には、ユダヤ教のタルムードの一句がありました、「一つの命を救う者が、世界を救える」。これは、  
天の考え方です。量で考えないのです、命という貴さで考えます。一人が悔い改めたら、天で大勢  
が喜び叫ぶのです。

## 2B 銀貨を無くした女 8-10

8 また、ドラクマ銀貨を十枚持っている女の人が、その一枚をなくしたら、明かりをつけ、家を掃いて、見つけるまで注意深く捜さないでしょうか。9 見つけたら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『一緒に喜んでください。なくしたドラクマ銀貨を見つけましたから』と言うでしょう。10 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」

こちらも、すぐに想像できる光景になっています。ドラクマというのは、ギリシアの通貨単位で、ローマの一デナリに相当します。一日分の労賃です。けれども、ここで大事なはその貨幣の価値ではなく、もっと精神的な形です。というのは、ここは婚姻に関連するもので、十ドラクマは花嫁料ではないか？と言われていました。または、女が結婚すると、十枚の硬貨をつけたネックレスを頭に付けることがありました。アッシリアの女性の民族衣装をクリスチャンの方が身に着けていたのを見たことがあります。確かに金貨でしょうか、それによるネックレスならず、ヘッドレス、頭に巻いていました。これが、結婚したことの印でした。その一枚が無くなってしまったのです！これは、精神的に大きなショックです。

それで、くまなく家中を捜します。当時は、貧しい家であれば、土ぼこりが立つような床です。裂け目や凸凹がありました。考古学の発掘では、そうした裂け目に入ってしまった硬貨から、当時の年代を特定するのですが、それだけ床に落ちた硬貨というのはありふれたことだったのです。そして、部屋の中は今のように明るくありません。明かりを付けます。そして、そのような凸凹の床ですから、箒で掃いて転がる音に耳を澄まします。見つけるまで注意深く、そして執念深く探します。そして、見つかったら大喜びです。先ほどの羊飼いと同じように、近所の人たち、友だちを呼び集めて、一緒に喜びます。興味深いですね、ルカは男性だけでなく、女性についても共に描いています。

そして御使いが天において喜んでいるとのことですが、黙示5章には、天に引き上げられた教会の姿があり、その後で無数の御使いが叫んで賛美しています。「5:11-12 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。彼らは大声で言った。「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。」

## 3B 息子をなくした父親 11-32

こうやって、主の心がここに見えました。くまなく捜す、他に九十九匹の羊がいても、または九枚の硬貨があっても、それでも失われた者のためには何としてでも捜す、ということです。父なる神が、なぜして、ご自分の子キリストを地上に遣わされたのか？といえば、ひとえにこの情熱に掛かっています。私たちが、自分たちが自分たちの正しさの中で満足してしまっただけでいいやしないか？イエス様が死ぬほどに愛してくださった魂に、同じような情熱で届こうとしているか？が問われます。

そこでイエス様は、少し向きを変えて、忍耐して待つ父として、神の心を言い表していかがいます。ここまでは羊、それから硬貨と、人間ではないために自由意志の側面が表れていませんでした。けれども、取税人や罪人は人間です、神のかたちに造られた者たちです。ですから、自由意志を持っています。神が自由意志を持っておられるように、私たちも自由意志があります。私たちが神に背くことに自由意志を用いたら、愛の神は人が悔い改めるのを忍耐強く待っておられるのです。私たちは午前礼拝において、どうやったら罪人を受け入れるのか？ということ学びましたが、犠牲を払い、忍耐することによってです。決してその罪を許容しません。けれども、忍耐するのです、犠牲を払うのです。そうやって受け入れていくことによって、その人が悔い改めへと導かれ、その時に大きな喜びが来ます。その姿を、放蕩息子の喩えから読み取ることができます。

### 1C 放蕩息子 11-16

11 イエスはまた、こう話された。「ある人に二人の息子がいた。12 弟のほうが父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。

この譬えは、ちょっと異常ともいえる状況があります。遺産相続は、父が年老いて、財産を管理できなくなったと思われる時に、遺産を分けるようにします。イサクが、目が見えなくなって、エサウを祝福しようとした時に、ヤコブがエサウの恰好をして、騙してその祝福を受け取った時のことを思い出してください。あのよう、財産を受け継がせる手続きは年老いて、死期が近いと思われる時に行うものです。そして長男が二倍の分け前をもらいます。ところが、この弟息子は、まだ元気な時に、「財産のうち私がいただく分を下さい」と言うのです。これは、通常では全くあり得ないことです。「お父さんは、早く死んでくれ」と言っているようなものであり、厳しく処罰することさえできたでしょう。そして父は、息子二人に財産を分け与えました。これはまさに、人が神から与えられたものがあるのに、神を拒んでそれを自分のもののように見なす姿とも言えるでしょう。

13 それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。

彼はまだ独身だったので、とても若い時です。若い時には愚かな、先を考えない決断をしてしまうものです。「遠い国に旅立った」とありますが、これは地理的、物理的な距離というよりも、宗教的、文化的な距離とも言えます。ガリラヤ湖畔では、北東にあるベツサイダからさらに東に回ると、そこはもうデカポリスです。そこで、豚をたくさん飼っている様子が見えましたね、レギオンとの戦いにおいて。もしかしたら、そう物理的にはそう遠くないところにいたのかもしれませんが、親の家を忘れることのできるようなところに行った、ということです。湯水のように使った、と言っていますが、後で兄息子が遊女のために使ったことを話していますが、おそらくそうだったのでしょう。

この息子が表しているのは、そうやって神のところにいることを望まずに、自分が自由にやって

いきたい、解放されたいと願っているのですが、実は、自分の肉欲の中に支配されて、身動きできない状態になっていたと考えることができます。パウロがこう言ったことですね、「エペ 2:3 私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」

14 何もかも使い果たした後、その地方全体に激しい飢饉が起こり、彼は食べることに困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせた。16 彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。

放蕩する人の問題は、何が起こるか先のことを考えない生活をしていることです。何もかも使い果たした後、そこに飢饉が起こりました。古代には、今、私たちが飢饉に遭うよりも、もっと頻繁に飢饉が起こっていました。エジプトにいたヨセフが、ファラオに対して7年の豊作の後に、7年に飢饉があるから、初めの7年のうちに倉庫を作って備蓄すべきであると提言しました。そういった知恵が全く欠如していたのです。それで、彼が食べるのに困っているために、人の家に身を寄せましたが、やらされたのは「豚の世話」です。ですから、ここが異邦人の地域であることがよく分かります。豚の世話など、ユダヤ人には最悪ですが、しかし、その豚が食べるいなご豆さえも腹が減って食べたいとまで願ったのですから、相当の困窮です。

ある意味で、「罪のどん底を見た人は、そこからの立ち返りを知っている」とも言えるかもしれません。午前礼拝でお話しましたが、イエス様が14章で群衆に対して、「財産のすべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません。」と言われた言葉に、むしろ応答したのは、これら取税人だったのではないか？と思われるからです。財産によって見えて来る生々しい世界を間近に見て生きていたのが、彼らではないかと思われるからです。どん底まで来たら、後は立ち上がるしかないからです。もちろん、私たちは神の恵みを知るために、どん底まで行くべきだと言うことでは決してありません。パウロは、ローマ6章で「6:2 決してそんなことはありません。」と言いましたが、往々にして私たちは罪のありのままの姿を見ずして、外見で自分は悔い改めたと思いがちです。心の奥底にある、もっと深いところにある罪深さを見ることなくして、ごまかして生きていることが多いからです。

そして主は、このようになるまでそっとしておかれるということさえ行われているとも言えます。人が自分の蒔いた種を刈り取り、罪がいかに憎むべきものか、自ら憎むことができるようになるため、そのままにしておかれるということさえあります。ここに、「だれも彼に与えてはくれなかった」とありますね。ある時には、何もしないという愛もあります。それを懲らしめであるとか、訓練として説明されているところがあり、ヘブル12章です。「12:10-11 肉の父はわずかの間、自分が良いと思うことにしたがって私たちを訓練しましたが、霊の父は私たちの益のために、私たちをご自分の聖さに

あずからせようとして訓練されるのです。すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。」ルカ 15 章にある、慈愛に満ちた父は実は、敢えて相続を分け与えて、彼がそうになってしまうのを知っていながらにして与えたという、厳しい父とも見えるのです。愛と従順に基づいた、真実な父子の関係を持つために通らなければいけなかった過程とも言えます。

## 2C 我に帰る息子 17-20

17 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。18 立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』』

聖書で、接続詞「しかし」が出てきたら注目すべき、とよく言われますが、ここが大きな分岐点です。「我に返っ」たとあります。本来の自分の姿に立ち返るための一歩です。神がご自分のかたちに造られたのですが、人はその本来の姿から大きく離れて、自分自身を追及する旅をしています。自分を造られた方、ご自分に似せて自分を造ってくださった方に立ち戻ります。

この父の家は裕福な家です。雇い人でさえが、かなり余裕をもって暮していることができるぐらい、裕福です。なので、そこに戻ろうと決めました。天に対して罪を犯したというのは、神に罪を犯したということです。そしてお父さんにも罪を犯しました。それゆえ、息子と呼ばれる資格はない、雇い人の一人にしてくださいと懇願しています。もっぱら父の憐れみにすがることを決めたのです。ここはとても大切で、彼は自分の罪を認めているのです。罪による結果も受け入れ、その責任を受け入れています。息子になる資格はもうないと認めています。多くの人が、悔い改めて信仰を持つことが、何か取引のように考える人たちがいます。ああ、天国に行けるから、ではイエス様を信じよう、というように。これは間違いです。その人は罪を認めていないので、いつかつまずいて、イエス様から離れてしまいます。神の恵みを知るには、神に受け入れられない、自分は死んで、死んだ後に裁きを受けるのに当然の身であることを知ることです。イエス様が十字架に付けられている時に、悔い改めた罪人(ざいにん)のことを思い出してください、自分たちは罰を受けるのは当然ではないか、と言ってから、それから、「あなたが御国に行かれたら、私のことを思い出してください。」と、憐れみにすがったのです。

20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。

まだ家から遠いのに父が彼を見つけたのです。そして父のほうから近寄ってきました。ということ、父はずっと息子を待っていたということになります。私たちは、神について自分から神が離れ



てしまった、神が見捨ててしまったということは、しばしば語られます。そして飢饉のような災いが来ると、神がなぜそのようなことを許されるのか？と思います。あたかも、自分が神を信じようと努力していて、神がそれを拒んでいるかのように語ります。しかし真実は逆です。自分が罪を犯して、その罪が神との仕切りとなっているのです。自分自身が神から離れていたのです。ですから、悔い改めとは、すぐそばにおられる神に振り向くことを意味します。神が、待っておられるのです、忍耐して待っておられるのです。これが、罪人を受け入れるということですね。

そして、「かわいそうに思い」とありますが、これはイエス様の働きについて、しばしば出て来る言葉です。かわいそうに思って、病人を治し、悪霊を追い出されました。腹から感じる憐れみです。そして父は、彼に口づけします。ここでは何度も何度も口づけした言葉になっています。彼は、まづもって汚かったでしょう。豚の世話をしていたのですから。そして、自分の財産を三分の一ももっていったのです。しかし、その子を受け入れ、何度も口づけしたのです。条件を付けないのです。汚いから口づけをやめることはなかったのです。神は、そのままのあなたを受け入れられます。そしてそのままの他の人を、受け入れられます。神に立ち返ろうとしている人に近くにおられます。私たちが、互いに受け入れ合うところには、こういった忍耐と犠牲の愛があつてこそ、受け入れ合うことができるのです。

### 3C 息子を祝う父親 21-24

21 息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。23 そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた。

ここで、雇い人の一人にしてください、と息子が言う前に父親が話し出しました。ここに、大いなる恵みがあります。私たちがいかに悔い改めたか？とか、私たちの態度がどれだけ改まったか？とか、そういったことの前に、圧倒的な恵みによって、愛によって、父親は息子を息子として受け入れ、祝宴を開いたのです。なんという恵みでしょうか、なんという愛でしょうか！エリヤ書に、荒らしい契約の約束として、「31:34 わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさない。」とあります。思い起こさないほどの赦しです！

雇い人の一人にするということを言わず、その反対のことを他のしもべたちにさせました。「一番良い衣」とありますが、これは父親の持ち物です。エステル記には、王が王の服をモルデカイに着せたことが書かれていますが、最も良い服を着せる、という意味合いがあります。ヤコブがヨセフに、あや織りの服を作ってやっていたのも同じような発想です。つまり、息子の権利を完全に回復させているということです。それから指輪ですが、これも同じ考えで、ファラオがヨセフに自分の

指輪を外して、彼に与えました(創 41:42)。そして履き物ですが、ということは今、息子は裸足だったということです。当時、奴隷は裸足で動いていました。それを回復させて、確かに雇い人ではなく、息子として受け入れることを示していたのです。こうやって、ただ受け入れられただけでなく、神の息子として受け入れられたのです。「エペ 1:5 神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」

そして息子が、いなくなっていたのに見つかったと言っていますが、それだけでなく、「死んでいのに生き返」ったと言っているのです。ここに、父親は、彼が生きていたけれども死んだとみなしていたことが分かります。父に反逆してなくなった時に、それは死とみなされていたということです。葬儀まで行ったかどうかわかりませんが、ここに死んでいるという意味が少し変わりますね。神から離れていること、自分を造られた神に背を向けていること、遠く離れていること、これらは死んでいるとみなされます。霊的な死です。けれども、神のところに戻って来た時に、新たに生まれるのです。

#### 4C 妬み怒る兄息子 25-32

このようにして、喜びの祝宴が行われました。まだ、食事をする事、祝宴をする事の話から離れていませんでした。これが、神の国の祝宴の姿であります。ところが、これをよしとしない人、怒っている人がいたのです。それが兄息子です。

25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえてきた。26 それで、しもべの一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27 しもべは彼に言った。『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。』28 すると兄は怒って、家に入ろうとしなかった。それで、父が出て来て彼をなだめた。

放蕩息子の話は、ドラマチックな弟息子の話が実は本質ではありませんでした。今、パリサイ人や律法学者の人たちにイエス様が語られていることを思い出してください。迷子になった羊を捜しに行く羊飼いの喜び、ドラクマの銀貨十枚の一枚をなくして捜して喜んでいた女、そしてこの放蕩息子の話を通して、次の兄息子の反応こそが、彼らに対する最終的な答えになっています。

ここでの問題は、父が喜んでいのに、そして父の家の者たちが一緒に喜んでいのに、自分は怒っているということです。家に入ろうともしないということです。つまり、ここではっきりしているのは、神の国の祝宴の喜びに入らないのは、まさに自分たちなのだということです。父のほうを外に出て来て宥めています。彼のしてきていることは正しいのかもしれませんが、ここです大事なのは、心が父と遠く離れていたのです。キリスト者であっても、この問題が起こるのです。正しくあろうとして努力している中で、最も肝心の心がどこかに捨て置かれています。イエス様がエペソの教会に対して、「あなたがたは、初めの愛から離れてしまった。」と言われましたが、そのことがしばしば

起こるのです。喜びの中にいるはずなのに、神の恵みに対してむしろ怒って、自分自身を神の国の祝福から遠ざけているのです。

29 しかし、兄は父に答えた。『ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったことありません。30 それなのに、遊女と一緒に父の財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。』

ここに彼が怒った問題があります。第一に、自分が父の戒めを守って、父に仕えてきたという自負があること。第二に、それなのに友達と楽しむように、子やぎ一匹下さったことがないと言っていること。ここに、「行いによる報い」があります。人間的にいうと、承認欲求です。自分のしていることを、人々に、また神に認めてもらいたいと思っています。これが、いつの間にかキリスト者の中にも入り込みます。なぜか？それは、「我に帰る」ということを本当の意味でしていないからです。つまり、自分が財を使い果たした弟息子のように、罪の生々しい姿に気づいていないと言えましょうか。私はこれだけやったのだ、それなのに認めてくれない、と呟くのです。神に認められる方法を知っていますか？パウロは論じました、「ローマ 4:4-5 働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。」何の働きがないのに、それでも義と認められる方を信じる人が、義と認められるのです！神を信じるということが、私たちの働きなのです。それによって、神は私たちと義とみなされるのです。

そこで第三の問題なのです、弟息子が父の財産を食い潰した、それなのに肥えた子牛を屠られたとは、と言っています。彼は父の気前良さ、恵み深さに怒っています。私は以前、「神の恵みは人を怒らせる」という主題で語ったことがあります。なぜか？自分の働きが、神の前では全く認められないからです。アブラハムがエジプト人ハガルによって生んだイシュマエルですが、神は彼を約束の子とみなされませんでした。モリヤ山でイサクを捧げなさいと主が言われる時に、「創 22:2 あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。」と言われました。イシュマエルという肉の努力の実は、息子とみなされていなかったのです。カインが、自分の耕した土地での作物を捧げて、神に認められず、怒りました。神は、もっぱら、ご自身の憐れみに動かされて、かわいそうに思って、それで罪を赦し、罪を赦すだけでなく、神の子どもとしての特権に回復してくださるのです。全く受けるに値しないものを神が与えることが、神の恵みです。

31 父は彼に言った。『子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。32 だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。』

父は、兄息子に、自分の彼への愛を確認しています。「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。」と言っています。そうなんです、私たちはいつもいるということに、感謝するのを忘れます。そこに大きな恵みがあるのに、その背後にある神の愛を見ていないのです。そして、「私のものは全部おまえのものだ。」というのは、事実そうでした。既に相続分与をしており、実は兄息子のものになっていたのです。ここも、神の恵みの祝福を受けているはずなのに、それをまるでまだ持っていないかのようにすねる、ひねくれるということが私たちにも起こります。

そしてイエス様が彼らに最も言われたかったことが、ここですね。「だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」彼は、先に、父親に対して弟のことを「息子」とだけ言って、自分の弟というのを拒んでいました。一緒に喜ぶ、ということを失っていたのです。兄弟を兄弟とみなさないこと。これは、第一ヨハネでは、兄弟を憎むことであり、罪であり、神を知らないし、神から生まれていないとまで言われています。受け入れない罪というものがあります。自分はキリストの体に属しているのに、共に苦しみ、そして共に喜ぶのに、自分だけがどう正しくあるかということに拘ります。

そして、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった、というところに、どうして喜ばないでいられようか？当然ではないか？という問いかけです。パリサイ派、律法学者は律法の字句に拘り、いや先祖からの言い伝えに拘り、自己完結の世界、自己実現の世界に閉じこもってしまいました。それで、人と人との関わりという自然なこと、そして、神のくださった恵みを受け入れないので、それで人間に神の下さった当たり前の感覚、なくなっていたのに見つかった、死んでいたのに生き返ったということにさえ無感覚になっていたのだということです。こうとも言えます、「神の恵みを恵みを持って受け入れる」ということです。つまり、神の恵みを心を窮屈にして退けるようなことをしてはいけない、ということです。神の愛はすぐそばにあります。自分の最も惨めな時、そこにキリストの愛があります。その愛に触れる時に、自分はずっとへりくだる人間になれます。真のへりくだりは、神の愛と恵みに触れる時に与えられるからです。